

## 家父長社会における宇野千代の作品に表われる情念

——英米女性作家との比較研究試論——

上 田 みどり\*

### 序

明治30年（1897年）岩国市生まれの宇野千代は大正10年、24歳で、「時事新報」の懸賞短編小説に応募し、処女作『脂粉の顔』で賞を取ってから、小説家としての人生が始まる。その後は昭和32年、60歳になって、中央公論社から『おはん』を刊行し、第10回野間文芸賞を受賞した。翌年の昭和33年、第9回女流文学賞を受賞する。75歳になった、昭和47年には第28回芸術院賞を受賞、昭和49年に勲三等瑞宝章を受けた。85歳の昭和57年には第30回菊池寛賞を受賞という、人生の後半になって社会から報われたような印象すら持たせる。しかし処女作の24歳から60歳のベストセラー作品までの約30数年という期間は東郷青児の聞き書き『色ざんげ』を除いて、大作といわれるものは少ない。この事実は宇野千代にとって何を表すのか、『おはん』の発表に至るまでの作家としての空白は単なる空白ではなく、このことが、作家宇野千代の多面性を表す一つでもあり、彼女自身の人生を豊かなものにしたことも確かである。この拙論は宇野の生きた時代の意味を精査し、作家自身の生き方と英米女性作家の生きる姿勢のちがいを考察する試みである。

「人生はいつだって今が最高の時なのです」と豪語する彼女の中年期は、まさにビジネスウーマンとしての成功期があったし、98歳という高齢で、その生き方は、seniority の手本ともなるべき積極性を示し、生命力溢れる生き方は、多くの者に勇気を与えると同時に社会的インパクトを与えるものである。

このような彼女の positive な生き方は、国内外で認められ、昭和36年（1961年）には、日本文学者ドナルド・キーン氏が『おはん』を英訳し英米で、刊行されている。その後もレベッカ・コーブランド女史が宇野千代を博士論文に取り上げ、ニュ

---

\* 広島経済大学経済学部教授

ーヨーク・タイムズ紙にその論評を載せ話題になったこともある。海外のこうした批評家たちが、なぜ宇野千代をとりあげるのか、そして彼らが英訳するにあたって、その理由をいくつかあげている。この拙論では、こうした宇野千代の作品のユニバーサルな評価の意味と、英米の女性文学者との並行比較をし、検証しようとするものである。

### (1) 『おはん』の情念

宇野自身の生き方は大抵の場合、自由奔放であると評される。彼女の言動は本音で自然であるが、当時としてはかなり反発もかい、作家自身に勇気の伴うものであったにちがいない。女性学やフェミニズム運動が盛んになる以前の、明治、大正、昭和、そして少しの平成を、連綿と生きてきた宇野の生涯を概観したとき、女性の発言は社会の中で、全く問題にされなかったかもしれない。あるいは社会的影響力大であればあるほど、社会からの攻撃をもともしない勇気を必要としたであろうことは想像に余り有る。

海の向こうのアメリカでは、奴隷解放を叫んだストウ夫人 [Harriet B. Stowe (1811-1896)] が、奴隷制廃止を盛り込んだ小説、*Uncle Tom's Cabin* (1851) により、米北部読者の感情を動かし、南北戦争の気運を促した<sup>(1)</sup>。一人の勇氣ある女性の文学が、社会を動かす気運を作り出した。日本をみれば、宇野の発言は、平塚ら いちょう<sup>(2)</sup>のようにいたけだかではなく、また男女同権を政府に要求するでもなく、社会制度の改革に委ねるものではない。むしろ長州女として個人の芯の強さを浮き彫りにする。それは隠れた女としてというものではなく、表だってこそ出ないが、陰で支えながら、筋が一本通った自己弁護しない潔さがある。

宇野の男性遍歴は話題に上る。彼女が小学校の教諭になり、辞めた時点から、当時の岩国の小さな村で、悪名高きうわさが流れたことは本人の自伝でも隠すことはしていない。そのような自己体験が織り込まれた作品は、極めて日本的特徴を持つ、「私小説」'I-novel' と称されるが、宇野の作品はその類とも違う特質をもつ。それはなぜかという点が、海外の研究者たちに関心をもたせる。私小説でもなく、自伝というわけでもない。それは、小説の語りの独自性に寄るところが大きいと思われる。

宇野自身恋多き女性であったことは明らかである。1964年、60歳後半に離婚しているが、その後において、若いときにみせたように情熱の赴くまま次の恋愛に走ることはしない。この時期に達し、自らの生涯と芸術への見識を変え始める。宇野はそのことを『生きてゆく私』の中で、「ロマンスの霧の渦を通して見えなかった世

の中のことが、まるで霧が晴れて青空になったみたいに、はっきりと見えて来るような気になったから不思議です」と描写する。これは傍観者としての姿勢ではないかと、日本文学研究者のレベッカ・コーブランド氏は、指摘する。さらに、この傍観者の立場はそれまで宇野自身欠けていた自信と自分自身の受容にも導かれたからということにもなると、コーブランド氏は続ける<sup>(4)</sup>。

宇野自身はそのことで、翻弄されるわけでもなく、作家個人の人生が、それによって破滅に導かれるというような話ではない。交流のあった男性作家や芸術家はいわゆる社会の一流と目される人物が並ぶ。尾崎士郎、東郷青児、北原武夫、小林秀雄、これらの人物に宇野本人が学ぶところも多かったであろう事は疑う余地もないが、彼女の彼らに与えた影響も大である。多くの別れの潔さも見事である。そしてなおかつ世に知られない男性の名前は、小説の中で露呈することもしない。小説の中の登場人物の男性は家庭で絶対的力をふるっていた典型的家父長社会の男である、自らの父親を彷彿させる男性よりも、むしろ女性に頼る弱い男性を登場させるほうが多い。

『おはん』の中で、おはんの夫は、芸者おかよのところに通いつめている。しががない元亭主に、「家に帰ってほしい」とは言わぬ哀しい強さを持ち合わせているのがおはん、元女房である。おかよとおはんの間を往還する意志薄弱のこの亭主との結末は、二人の大切にしている悟という名のひとり子の死によって壊滅的に締めくくられる。宇野自身の父親の存在は、当時日本の家父長社会の典型であり、語り手おはんの夫は、その父の反面を表象するものでもある。日本の古い規範を引きずりながら、作家の20世紀の新しい感受性を求めて出発する地点として、この古い伝統的材料を使っているとも考えられる。この古い社会規範は、日本の現在の社会の奥深い場でどこにでもみられる。過去が優れているからではなく、今日半分奥深く潜んで生き残っている日本の過去に、作家は光を当てるため書くのだと、ドナルド・キーン氏は指摘する<sup>(5)</sup>。父の命令に自然に従い、成り行きに刃向かう事はないおはんの姿は、作家宇野千代自身に重なる。そして、悟の死を「定命」として引き受けるおはんの姿は、千代自身の人生観の中で仏教的概念から導かれる、人生の難題を「業」として引き受ける用意があることを示唆する。決して他人の人生に踏み込まないし、自分の存在によって相手の人生を壊すことはしない。従って、おはんは、夫をのしり恨み続けて生きるよりは、身をひく潔さを持ち合わせるほうを選ぶ。そのほうが自然だからである。『おはん』の結末の事件は劇的であるが、その後の主人公たちの生きる姿勢が、日本風土に古層として残る情念の表象として、受け入れることは容易いと解釈できる。

## (2) 『薄墨の桜』と『おはん』の情念の行方と不可思議な神秘性

宇野の作品は、作家自身が題材とする場所に必ず行って体験することで描かれる。78歳の昭和50年（1975年）には『薄墨の桜』を新潮社から出版している。作品は、女性問題と、高齢社会の問題も含む内容で、女性の情念の深さ、愚かさと凄さをすばらしく纏め上げているものである。これは岐阜県の根尾村まで宇野千代自身が足を運び、実態を観察した後の物語でもある。従って、アメリカでは南北戦争（1861-1865）も知らないで家に引きこもったエミリー・ディッキンソン Emily Dickinson [(1830-1886)]<sup>(6)</sup>とは、社会性の幅が異なっているように思う。ディッキンソンはある失恋を契機に、一生 Amherst の父の家を出なかったのは、宇野の作品制作とは対照的である。

また、英文学の大作である Bronte 姉妹<sup>(7)</sup>の作品、『嵐が丘』において、主人公のヒースクリーフがどのようにしてお金を稼いだかは、作品を読むかぎり、説明はつかない。作者自身がどれほど当時の社会の経済活動を知識として持っていたかは疑問である。

1979年の『薄墨の桜』の主人公芳乃は、何も言わないで老婆の傍らで死を選び、愛する者を救うため自分も命を絶つ。蘇生した薄墨の桜のあの生命力が、主人公芳乃の美しさにひそむと考える情念の行方の解釈は、極めて日本的独自性があるように思われる。自然の中に神が存在するというより、自然つまりここでは桜の中に大いなる目に見えない魂の力の融合を感じとり畏敬の念を持って、その見えない力の存在を認めているように思う。その語りの中に実在する時間空間を越えた神秘的な一つの場を読者に提供することになる。

Uno concentrates on creating a narrative voice that is alive and an atmosphere that is rich with romantic associations. The novel is set at the turn of the century in an unnamed castle town very much like Uno's hometown, Iwakui. But as the story progresses, time and place are suspended, and the reader is transported back to the feudal world of the old puppet theater. Here the tiny white face of the timid wife glows palely among the shadows; the geisha appears in a flurry of vibrant silks, her gorgeous face barely visible beneath her rich coiffure. Interspersed here and there are the clatter of geta, the click of flint stones, and the twang of the samisen ... all woven into a musical brocade worthy of the master playwright

of the puppet theater, Chikamatsu Monzaemon (1653–1724).<sup>(8)</sup>

文の中に編みこまれた小説の時代性とその劇場性は日本独特の空間を醸成し、それは外国の（ここではコーブランド女史）研究者の創造力をも喚起するのである。作品『薄墨の桜』の最後のどんでん返しは、イーディス・ウオートン [Edith Wharton (1862–1937)] の、*Ethan Frome*<sup>(9)</sup> の最後を思わせる壮絶さと、不条理にも、あるがままに受け入れざるを得ない人生の営みを示すものでもある。特殊な自然環境の中でそこからはい出ることのできない状況にある登場人物の生き様には類似性が見てとれる。

### (3) 社会貢献

岐阜県根尾村の樹齢1200年の老木の蘇生を願う宇野千代という作家の目は、作品を描写する想像力とともに実行力とを併せ持っていた。老桜を桜の木の医者に見せ、接木をし、そのための資金を、もらうべく筋を通して持ってくるあたりは、まさに村おこし、街おこしの仕掛け人でもある。環境保全を早くから気づき、資金集めを着実に実行するあたりは、ビジネスセンスもあったことを物語り、証明するものである。

実際、昭和11年（1936年）39歳の時、和服の会社、スタイル社を設立しているのも、たとえ62歳の時、スタイル社倒産ということになったけれども、彼女のビジネス感覚の鋭敏さを伺えるものである。これは社会的仕組みにうとい当時の女性の社会性という点からしても、彼女のポジティブな思考には、外国の女性作家との比較においても目を見張らせるものがある。しかもこの自分のデザインした桜の着物を芳乃という主人公が身にまとって死ぬという設定により、作品に臨場感を与え、作品の広がりを増す。しかもこうした起業家としての成功は、現代の女性の社会参加にも影響力を持ち、これほどの年齢でそれを成し遂げたことに対して多くの seniority に勇気を与えるものでもある。

### 結 論

日本文学は紫式部の『源氏物語』を初めとして、主な作品が女性によって書かれていることは海外でも周知のことである。13世紀から19世紀の長い間、教育を受けられず自由のなかった女性たちが、成功した作家になり、女性文学の長い伝統を続けるために、宇野千代のような女性たちが浮かび出たのは極最近になってからだ<sup>(10)</sup>とドナルド・キーン氏は指摘する。

近年、女性の自由も教育も肯定されるようになり、西洋の学問を学ぶ機会を与えられ、教育の中でしっかりと根づいてきた。ジェンダー学などの学問を学ぶ機会も多くなり、女性の意識は変わりつつあることは確かである。しかし日本古来の思想の古層には、西洋とはかけ離れた、仏教的あるいは儒教的思想、自然とのかかわりなど日本独特のものが流れていることは否定できないように思う。

「西洋でこれらの物語を読むことは、現代日本社会の下に流れる過去の隠れた川の底にある何かを発見することである」とドナルド・キーン氏は、その魅力を語る<sup>(11)</sup>。過去の隠れた川の底は、海外の研究者たちに容易に掬い取ることの出来ない神秘性を提示する。その中で、宇野千代の作品は日本独自の神秘性を保ちつつ、今なお多くの海外の研究者をも惹きつけるのである。

## 注

- (1) 『英米文学辞典』研究社 p. 1292
- (2) 評論家、婦人運動家で、1911年女性文芸誌『青鞥』を発刊。後、市川房江、奥むめおらと、女性の地位向上をめざす新婦人協会を結成し、婦人参政権運動を展開。自伝『元始、女性は太陽であった』がある。
- (3) 宇野千代『女のいのち』（日本図書センター2000年）p. 10。
- (4) Rebecca Copeland, *The Story of A Single Woman* の序文の一部に書く。  
(Peter Owen Publishers, Uno Chiyo 1992)
- (5) Donald Keene, introduction of *Ohan*
- (6) 『英米文学辞典』研究社, p. 331 アメリカの女流詩人。厳格な Puritan の父を持ち、Massachusetts 州 Amherst に生まれ、500篇余りの詩を書く。自然と人生、死と愛とを謳った。観念的なものが多い。
- (7) Rebeca Copeland, *Japan Quarterly*, April–June 1988, p. 180.
- (8) Bronte 姉妹：Charlotte Bronte, Emily Jane Bronte, Anne Bronte の三姉妹の小説家。特に、Emily Jane Bronte (1818–1848) は内省的で、孤独に生きる性癖が強かった。詩人としては姉妹中抜群である。1847年の *Wuthering Heights* を発表して翌年死亡。
- (9) *Ethan Frome* (1914) は、Wharton としてはめずらしく、舞台を New England の寒村に置き、登場人物も貧しい農民である。だがその主題とするところは結局、人間らしい自由を求めながら、「共同社会」のおきてに縛られて自滅してゆく、個人を描いたもので、Wharton の中心テーマははずれていない。厳しい New England の冬と赤貧のうちで、病身の妻を抱えて苦闘する、Ethan は、手伝いに来た少女 Mattie の若さと明るさに人間的な救いを見出そうとする。だが、彼の道義心は妻を見捨てることを許さず、また村人の自分に対する信頼をうらぎることも許さない。おいつめられた彼は Mattie との心中をはかるが、それにも失敗して身障者となり一生を送る。その面倒をみているのが、見捨てたいと思っていた妻なのである。頑なな因習と同時にそのうちに生きる主人公にはきわめて高貴な倫理観が与えられている。『総説アメリカ文学史』研究社 p. 230
- (10) Donald Keene, introduction of *Ohan*
- (11) *ibid*, p. xvi.